

Leader
学校法人 就実学園・理事長

千葉 喬三

Interviewer
進研アドBetween編集長
長田雅子

いくつもの改革を
実行し
学園を変化させるのは
子どもたちや学生のため

「変化のないところに発展はない。改造という言葉を使い、学園を発展させていく」と語る千葉 喬三理事長。就任以来、強いリーダーシップで思い切った施策を実現に導いてきた。学園の改造にかける思いと今後の展望を聞いた。

大学全体でつくる 学生を育てるしくみ

長田 理事長に就任されて以来、就実大学・短大における教員の業績評価の導入をはじめ、次々と改革を具体化しておられます。どのような思いが推進力となっているのでしょうか。

千葉理事長(以下千葉) 日本で教員の業績評価を導入している大学はまだわずかですが、世界では当たり前に行われています。これは、PDCAサイクルにおけるC、つまりチェックにあたります。プランを立て、実行すれば、その評価をせずに次のアクションを起こすことはできません。教員の業績評価は、教育の質を向上させ続けるために、なくてはならないものです。

各教員の1年間の教育業績、研究業績、管理運営の実績、社会貢献活動、外部資金の獲得状況などに基づいて評価をしています。そして、賞与などの処遇に反映しています。

長田 教員の処遇にまで踏み込んだ業績評価の実施には、反発や抵抗もあったのではないのでしょうか。

千葉 理事長に就任して各方面から聞いた就実大学・短大の評価は、残念ながら予想していたほどではありませんでした。その責任を教員一人ひとりが真摯に受け止め、学生のために本気で取り組む必要があると訴えました。

業績評価の導入は、改革の入り口に過ぎません。海外の先進的な大学には、大学全体で優秀な人材を育成するしくみがあります。本学も海外に負けない、そのようなしくみを構築したいと考えています。

長田 具体的にどのようなしくみになるのかお聞かせください。

千葉 教育業績の評価は、現在は学生による授業評価にとどまっていますが、教員の教育活動全般を評価できるシステムを2014年度から導入する予定です。教育活動は、講義室で行う授業だけではなく、クラブ活動の面倒を見たり、就職の相談に乗ったり、大学にはさまざまな教育の機会があります。学生の活動を記録して管理するポートフォリオに、教員のそうした活動も記録するしくみをつくり、人材育成における貢献度を多面的に評価する方針です。

授業のやり方も見直します。高校までの授業は知識の修得が基本ですが、大学の授業では、知識を土台にして自分で問題を見つけ、考える力を身に付けることが重要です。教員自身が研究を通して課題の発見と解決に創造的に取り組んできた経験をふまえ、学生に考えさせる演習方式の授業を行うことが必要です。大学の教員に教育と研究の両方が求められる理由が、ここにあります。個々の教員の努力だけに任せるのではなく、全学で教育体系を構築して実施していきます。

もう1つ考えていることがあります。それは、教員の教育と研究、学生の成長に関する情報などを集めて分析し、大学全体の戦略を考え、実行に移していく。そんな役割を果たす“管理教官”がいる組織づくりです。

世界に通用する 経営のプロを育成

長田 2014年度に開設予定の経営学部の構想にも、大きく関わられたと伺っています。背景や理由について教えてください。また、どのような人材

を育てたいとお考えですか。

千葉 長年、わが国は技術立国として最先端の製品を生み出してきましたが、ICチップやパソコンはアメリカに世界標準の座を奪われ、テレビや携帯電話は韓国にトップシェアのポジションを明け渡しています。勝敗を決したのが、「経営」の力です。経営学部では、日本に今必要とされている、グローバル化した競争社会で経営を実践できる人材を育成します。海外であっても、相手国の事情やユーザーの動向を知り、製品づくりに反映させる。そして、国際的な法秩序やルールに基づき、ビジネスを行える人材です。

経営学部には、国際的に活躍する人材を育てる「グローバルビジネスマネジメントコース」と、地域経済を担う人材を育てる「リージョナルビジネスマネジメントコース」の2コースを設けます。また、2018年を目標に、経営学修士(MBA)の学位を取得できる大学院の設置もめざします。

長田 社会的ニーズに応える経営学部の教育は、建学の精神「去華就実」(外見の華美を追わず、内面の充実に努める、の意)に基づく人材育成に通じるのではないのでしょうか。

千葉 そのとおりです。経営学部では、実地有用な人材を育成するために、徹底した現場教育を行います。グローバルビジネスマネジメントコースでは海外留学を、リージョナルビジネスマネジメントコースでは企業でのインターンシップを、2年次後期という早い段階で実施します。さらに、豊富な現場経験を持つ教員を配置し、授業においても実践力を育成します。

経営力では世界に差をつけられている日本企業ですが、一方でその強さを



ちば-きょうざう 1939年生まれ。兵庫県出身。1969年京都大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学。高知大学農学部助手、岡山大学農学部助教授、農学部長、理事・副学長、学長を経て、2011年6月から現職。就実大学特任教授、追手門学院理事、ベトナム国立フエ大学名誉教授などを兼任。主な著書に「岡山の樹木」(山陽新聞社出版)。博士(農学)。

支えているのが“現場力”です。例えば、日本の自動車メーカーは、管理職も現場に立ち、改善などの指示を直接出していたことが、飛躍的な技術向上と成長を遂げる要因になったと言われています。経営学部では、このような現場力を大切に、現場で経営を実践できるスキルとセンス、マインドを育てていきます。

長田 学部の魅力を受験生にどのように伝えていきたいとお考えですか。

千葉 高校訪問などを通じて、経営の重要性や将来性を伝えます。理論重視の「経済」ではなく、実践重視の「経営」に学びがいを見だし、本学を選んでほしいと思います。

幼・保から大学院までの 一貫教育体制へ

長田 2012年には岡山市初の幼保一体施設「就実こども園」を開設されました。子育て支援や初等教育における取り組みについて教えてください。

千葉 就実こども園は、地域の幼児教育・保育のニーズに一体的に応える子育て支援施設です。制度上は幼稚園と

保育所に分かれています。幼稚園教諭と保育士の両方の資格を持つ者が分け隔てなく充実した教育・保育を行うのが特徴です。

重視しているのは、将来にわたって人格形成の基盤を成す心の教育です。さまざまな体験や体感を通じて、命を大切に、他者を思いやる心といった人としての基礎を育てています。こうした教育を就学後も実施するために小学校の開設準備を進めています。実現すれば、就実学園に子ども園から大学院までの一貫教育体制が確立します。

人は、種から発芽して育ついわば一本の植物。そのようなまなごしを持ち、成長を継続して支援することが理想です。一貫教育体制の確立により、教育の理想と「去華就実」の理念をさらに追求できるステージが整います。

2014年は、学園創立110周年。この節目を新たな「改造元年」とし、一貫教育の実現など、さまざまな取り組みを進めます。また、学園の存在意義や使命をあらためて問い直し、次代を担う人材の育成のために何をすべきかを考え、行動していきます。